



JICA
だより



ラオス

(1997～99年派遣)

はんだう

椋 清美さん(51)

廿日市市

JICA海外協力隊での活動から、四半世紀が経過した。私は1997年から2年間、ラオスの首都ビエンチャンにある総合病院検査室で、臨床検査技師として現地の医療従事者とともに臨床検査技術の向上を目

指して活動した。

着任当初、病理検査は実

施されておらず、がんの発

生状況は不明だった。そこ

で、子宮頸がんなどの発見

に役立てるため、比較的安

価にできる細胞診断の実施

に向けて、院内研修会の開

臨床検査の技術伝える

催や細胞診断の普及活動に

取り組んだ。帰国する頃

には、ゼロに等しかった婦人

科細胞診断の認知度が「少

し上がった」と実感でき

たが、実用には至らなかった。

帰国後も病理検査(組織

検査、細胞検査)の実施拡

大を目標に、不定期ではあ



理診断が可能となった。だが、病理医は数人しかおらず、今後も人材育成支援を継続、強化していく必要がある。

一昔前は、海外での支援活動の中心となる医療従事者は医師、看護師だったが、

海外協力隊員時代にラオスで取り組んだ婦人科細胞診断の研修会。奥左が筆者

るが日本の医療従事者や企業の有志とラオスへ渡り、病理医や病理検査担当技師の育成、技術移転などに当たってきた。現在、ビエンチャンの医療施設、大学など数力所で病

子短大で臨床検査技師の育成に携わっている。ラオスとのつながりを生かし、2019年と23年にスタ

ディーツアーを開き、同国の医療現場の視察や異文化体験ができる機会を学生に提供した。国際社会に貢

献できる臨床検査技師への志望や海外協力隊への参加につながるかと願っている。

加えて、今も訪れれば四半世紀前と同じように接してくれる心温かいラオスの人たちに感謝している。